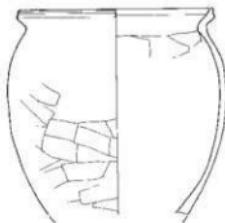


# 米沢町遺跡

## (第5地点)

-住宅展示場建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-



2007

水戸市教育委員会  
有限会社 日考研茨城



# 米沢町遺跡

## (第5地点)

-住宅展示場建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-

2007

水戸市教育委員会  
有限会社 日考研茨城



## ごあいさつ

「米沢町遺跡」は、千波湖に注ぐ逆川右岸の台地上に位置しております。「米沢町遺跡」の周辺には、7世紀中葉頃に築造された首長墓とみられる国指定史跡「吉田古墳」や弥生時代から平安時代にかけて集落が営まれた「大館町遺跡」や「葉王院東遺跡」など多くの遺跡が残されており、古くから政治・文化の中心地域のひとつとして繁栄してきたと考えられます。

歴史的文化遺産のひとつである埋蔵文化財は、工事や開発などにより一度破壊されると二度と原状に復すことができないため、私たちが大切に保存しながら後世へ伝えていかなければならない貴重な財産です。

近年の大規模開発等による都市化の様相が強まる中で、埋蔵文化財の現状保存は非常に困難になりますが、本市においてもその意義や重要性を踏まえ、文化財保護法及び関係法令に基づいた保護保存に努めているところです。

このたびの調査は、当該遺跡内に住宅展示場の建設が計画され、遺跡への影響が予想されたため、文化財保護の観点から十分に協議を重ねた結果、遺跡の現状保存が困難であるとの結論に至り、次善の策として発掘調査を実施し、記録の上での保護措置を講ずることとしたものです。調査では平安時代初頭頃の竪穴建物が確認され、本遺跡が律令期には集落として機能していたことが判明しました。

ここに刊行する本書が、かけがえのない貴重な文化財に対する意識の高揚と学術研究等の資料として、広く御活用いただければ幸いです。

終わりに、本調査に当たり多大なる御理解と御協力をいただきました大和ハウス工業株式会社の皆様、並びに種々の御指導、御助言をいただきました文化庁文化財部記念物課、茨城県教育庁文化課の皆様方に心から感謝を申し上げます。

平成19年3月

水戸市教育委員会  
教育長 鯨岡 武



## 例　　言

1. 本書は茨城県水戸市に所在する米沢町遺跡のうち、千波町の住宅展示場建設工事に先立ち実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査は大和ハウス工業株式会社茨城支店の委託を受け、茨城県教育委員会・水戸市教育委員会の指導のもと、有限会社日考古研茨城が主体となって実施した。
3. 遺跡の所在地、調査面積、調査期間等は以下のとおりである。

所 在 地	茨城県水戸市千波町字中道南1501-3, 1501-4
調査面積	82.05m <sup>2</sup>
調査期間	平成18年5月22日～5月25日
整理期間	平成18年6月3日～平成19年2月28日
4. 米沢町遺跡の本調査および試掘・確認調査は今回で5回目であるため、本調査区については「米沢町遺跡（第5地点）」と呼称する。
5. 発掘調査の組織は下記の通りである。

調査主体	鯨岡　武	水戸市教育委員会教育長
事務局	小澤　邦夫	水戸市教育委員会教育次長
	森田　秀人	水戸市教育委員会事務局生涯学習課長
	成田　行広	水戸市教育委員会事務局生涯学習課長補佐
	宮崎　賢司	水戸市教育委員会事務局生涯学習課文化財係長
	黒須　雅継	水戸市教育委員会事務局生涯学習課文化財係主事
	川口　武彦	水戸市教育委員会事務局生涯学習課文化財係主事
	新垣　清貴	水戸市教育委員会事務局生涯学習課文化財係埋蔵文化財専門員
調査指導	関口　慶久	水戸市教育委員会事務局生涯学習課文化財係文化財主事
調査担当者	小川　和博	日本考古学協会会員　（有）日考古研茨城代表取締役
調査員	遠藤　啓子	（有）日考古研茨城調査研究員
調査・整理参加者	相田三郎、井澤良忠、井澤しつい、菊地等、佐藤實、塩澤和紀 大沢由紀子、大野美佳	
6. 本書の編集は関口慶久（水戸市教育委員会）の指導のもと、小川和博（有限会社日考古研茨城）が担当し、執筆は関口・川口武彦（水戸市教育委員会）・小川・大沢淳志・遠藤啓子（有限会社日考古研茨城）が分担した。文責は各文末に記載している。
7. 出土した遺物および原図・写真類は、水戸市教育委員会が保管している。
8. 発掘調査の実施から報告書刊行に至るまで、下記の方々および機関より御指導・御協力を賜った。記して謝意を表したい（順不同・敬称略）。

青山俊明、飯島一生、今尾文昭、大塚初重、岡本東三、川崎純徳、黒澤彰哉、後藤道雄、佐々木義則、日高慎、山中敏史、茨城県教育庁文化課、文化庁文化財部記念物課、大和ハウス工業株式会社茨城支店

## 凡　　例

1. 本書で使用した図面の方位は全て座標北である。
2. 遺構図における主軸の方向は長軸が基準である。
3. 遺構の略称に使用した記号は以下のとおりである。  
　　堅穴建物：SI　土坑：SK　攢乱：K

## 本文目次

あいさつ	
例言・凡例	
本文目次	
挿図・表目次	
図版目次	
第1章 調査に至る経緯と調査経過	
1－1 調査に至る経緯	関口…… 1
1－2 発掘作業の経過	大渕・遠藤…… 2
1－3 整理作業の経過	大渕・遠藤…… 2
第2章 遺跡の周辺環境	
2－1 地理的環境	川口…… 3
2－2 歴史的環境	川口…… 3
2－3 米沢町遺跡における既往の調査	川口…… 8
第3章 検出された遺構と遺物	
3－1 平安時代	小川…… 11
第4章 総括	小川…… 17
引用・参考文献	

## 挿図目次

第1図	試掘調査トレンチと検出された遺構の配置	1
第2図	米沢町遺跡の位置と周辺の遺跡	3
第3図	米沢町遺跡における既往の調査地点	9
第4図	米沢町遺跡(第1~4・6・7地点)の位置	10
第5図	遺構配置図	11
第6図	竪穴建物跡SI01実測図	12
第7図	竪穴建物跡SI01カマド実測図	13
第8図	竪穴建物跡SI01出土遺物	14
第9図	土坑SK01・02、柱穴状遺構P01・02・03・04・05・06実測図	15

## 表目次

第1表	米沢町遺跡の位置と周辺の遺跡一覧
第2表	米沢町遺跡における既往の調査
第3表	竪穴建物跡SI01柱穴一覧
第4表	竪穴建物跡SI01出土土器観察表

## 図版目次

PL. 1	1.調査区全景、2.調査区全景
PL. 2	1.遺跡遠景、2.竪穴建物跡SI01、3.竪穴建物跡SI01カマド
PL. 3	LSK01、2.SK02、3.P03・06、4.P01・02、5.P04・05
PL. 4	竪穴建物跡SI01出土遺物

# 第1章 調査に至る経緯と調査経過

## 1-1 調査に至る経緯

平成18年4月17日付で住宅展示場建設の開発計画に伴う埋蔵文化財の照会が事業者 大和ハウス工業株式会社茨城支店長 松田修一(以下、事業者)から、水戸市教育委員会(以下、市教育委員会)生涯学習課文化財係に提出された。

照会地である水戸市千波町字中道南1501-3、1501-4は、周知の埋蔵文化財包蔵地「米沢町遺跡」の範囲に該当していることから、事前に試掘・確認調査を実施する必要があること、文化財保護法第93条第1項に基づき、茨城県教育委員会教育長あて発掘の届出を工事着工の60日前までに提出する必要があること、茨城県教育委員会教育長から当該埋蔵文化財の取り扱いについての通知があること、遺跡の発掘調査を必要とする場合には、原因者の全面的な協力をお願いする旨、回答した(教生第349号)。

その後、事業者と試掘・確認調査の日程を調整し、平成18年4月20日・21日の2日間にわたって実施した。

開発対象地のうち、申請建物部分に2.0m×1.0mのトレント3本(トレント1～3)、5.5m×2.5mのL字状のトレント1本(トレント4)を設定し、関東ローム層上面を目標に掘削したところ(第1図)。トレント1～3では遺構・遺物は確認されなかつたが、トレント4では地表下70cmで遺物包含層と竪穴状遺構が確認されるとともに、土師質土器が数点出土した。トレント1～3における関東ローム層上面の確認深度はそれぞれ、110cm、80cm、110cmであり、最終的な調査面積は合計17.20m<sup>2</sup>であった。

トレント4から遺構・遺物が確認されたため、事業者とその保存について再三協議を重ねたが、設計上バイル工法は避けられないとの結論に達し、埋蔵文化財発掘の届出に添付する意見書において記録保存を目的とした本発掘調査が相当であるとした。

この届出に対し、茨城県教育委員会教育長から平成18年4月19日付文第210号にて、工事着手前に発掘調査を実施し、調査の結果重要な遺構等が発見された場合には、その保存等について別途協議をする旨の勧告があった。

これを受けて事業者は、平成18年4月21日付で有限会社日考研茨城と発掘調査業務委託契約を締結するとともに、市教育委員会・事業者・受託者間における三者協定を締結し、平成18年5月22日より発掘調査を実施することとなった。

(閑口)



第1図 試掘調査トレントと検出された遺構の配置

### 1-2 発掘作業の経過

米沢町遺跡の本調査は、平成18年5月22日から5月25日まで実施した。先に実施した試掘調査結果に基づき、開発予定部分にあたる244m<sup>2</sup>を調査することができた。なお、発掘は開発における掘削部分のみを対象としたため、検出された竪穴建物跡が部分調査となってしまった。

まず5月22日から重機による表土層除去、遺構確認を行った。調査面積が狭小のため確認できた竪穴建物跡1棟も未発掘部分を残す結果となつたが、逆に限定された調査区にもかかわらず竪穴建物跡1棟、土坑2基、柱穴状遺構6基を調査できることは幸運であった。

2006年5月22日～2006年5月25日

5月22日 重機による表土層除去後、人力で精査を開始。竪穴建物跡(SI01)を検出。

5月23日 遺構調査を継続。竪穴建物跡のほか、土坑2基、柱穴状遺構6基を検出し精査を開始する。

5月24日 竪穴建物跡(SI01)、土坑(SK01・SK02)の平面実測と全体測量を行う。

5月25日 竪穴建物跡(SI01)、土坑(SK01・02)、柱穴状遺構1～6(P1～6)を完掘、実測・写真撮影を行い、調査を完了する。

(大潤・遠藤)

### 1-3 整理等作業の経過

調査面積に対して、竪穴建物跡1棟、土坑2基、柱穴状遺構6基が検出できたことは予想外のことであった。さらに出土した遺物も比較的まとまっており、報告書の刊行を含めると予算範囲内で納めるのは無理であろうと思われた。しかし、市教育委員会の担当者をはじめとする関係者の全面的な協力を得ることができ、一通りの整理作業を実施することができた。

出土品の整理については、土器類および鉄器に分け、まず土器類である須恵器・土師器の水洗、注記、接合を行い、続けて土器の実測およびヘラ記号等の採拓等を行い、鉄器の実測を実施。また現場で測量した遺構等の図面の修正、トレース。さらに遺物のトレースを行う。印刷用の版下を作成する際、遺構トレースは1/60、1/40を基本に、遺構の大きさによって拡大、縮小した。また遺物トレースは報告書の出来上りにおいて土器類1/4および鉄器を1/2になるように仕上げた。

つぎに現場で撮影した記録写真については、カラースライドは現像後スライドファイルに、白黒フィルムは現像とベタ焼き処理し、ネガアルバムにそれぞれ収納した。

報告書刊行後は出土品と記録写真、図面類すべて水戸市教育委員会へ一括返却を行い、博物館等の展示や学校教育、研究資料として活用、検索できるよう処理した。

(大潤・遠藤)

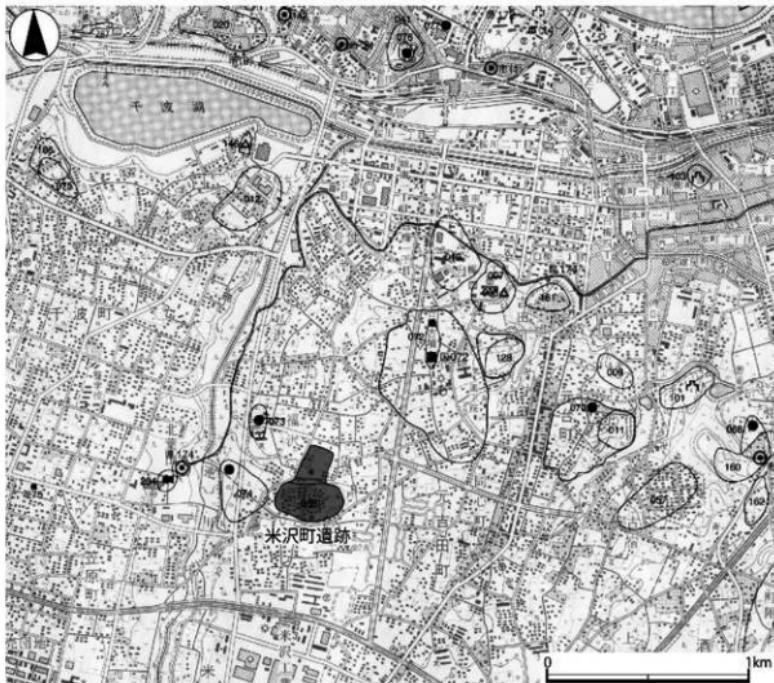
## 第2章 遺跡の周辺環境

### 2-1 地理的環境

米沢町遺跡は、北緯36度21分16秒、東経140度28分05秒(世界測地系)の茨城県水戸市千波町字中道南1501-3ほかに所在する縄文時代、古墳時代、奈良・平安時代、中・近世の複合遺跡である。調査地点は、逆川右岸の標高29mの台地上に位置しており、低地との比高は約19mである。遺跡は東西330m、南北400mの範囲に広がっている(第2図)。

### 2-2 歴史的環境

米沢町遺跡が立地する逆川流域の台地上には先土器時代から近世に至るまでの多数の集落跡と古墳、城館跡、生産遺跡、水道跡が確認されている(第2図、第1表)。以下では先土器時代～近世の周辺遺跡について概観する。



第2図 米沢町遺跡の位置と周辺の遺跡

第1表 米沢町遺跡の位置と周辺の遺跡一覧

遺跡番号	遺跡名	種別	所在地	時代	調査年次
7	水戸南高校遺跡	集落跡	白梅2丁目	縄文早~後・弥生・古墳	
8	古田貝塚	貝塚	元吉田町丹波版	縄文(中)	
9	安楽寺遺跡	集落跡	元吉田町安楽寺	縄文(中~後)	
10	お下屋敷遺跡	集落跡	元吉田町お下屋敷	縄文早~後・弥生(後)・古墳・平安	
11	大堀町遺跡	集落跡	元吉田町2309番外	縄文(中・後)・弥生(後)・古墳・奈良・平安	
12	下本郷遺跡	集落跡	千瀬町下本郷	縄文(中)	H17
20	笠神町遺跡	集落跡	笠原町3番地外	縄文(中)	H17~H18
41	東照宮境内遺跡	集落跡	宮町2丁目	弥生(後)	
57	横宿遺跡	集落跡	元吉田町吉宿外	縄文早~後・弥生(後)・古墳(前)	H17
58	美沢町遺跡	集落跡	元吉田町飛谷	弥生(後)・古墳	H17~H18
68	酒門台古墳群	古墳群	酒門町	古墳	
70	大堀町古墳	古墳	元吉田町大堀町	古墳	
72	吉田杏塘跡	古墳群	元吉田町杏塘	古墳	S47~H16~H18
73	弘沢古墳群	古墳群	千瀬町弘沢	古墳	
74	仙波古墳群	古墳群	米沢町仙波	古墳	H18
75	千瀬山古墳群	古墳群	千瀬町千瀬山	古墳	
76	東照宮境内古墳群	古墳群	宮町2丁目	古墳	
77	無名古墳	古墳	三の丸1丁目	古墳	
191	吉田城跡	城郭跡	元吉田町2733	中世	
103	武船城跡	城郭跡	柳町2丁目	中世	
106	千瀬山遺跡	集落跡	千瀬町千瀬山	縄文(中)	
128	第3回東城跡	集落跡	元吉田町599-2番	縄文(中)・弥生(後)・奈良・平安	H1
142	梅香寺跡	火葬墓	梅香寺2丁目	奈良・平安	
146	柳崎貝塚	貝塚	千瀬町柳崎	縄文(中~前)	
160	酒門台遺跡	集落跡	酒門町台11外	弥生(後)・古墳・奈良・平安・中世・近世	
161	古田神社遺跡	集落跡	宮内町3193-2	弥生(後)・古墳	
162	南輪坂遺跡	集落跡	酒門町南輪坂	弥生(後)・古墳・奈良・平安・中世・近世	
172	水戸城跡	城郭跡	三の丸~2丁目	近世	H5~H13~H17~H18
174	黒原水道	水道跡	笠原町993番外	近世	
234	笠原古墳群	古墳群	古墳		
235	笠原南塚	塚	笠原町1044-8	近世	
287	七面製陶所跡	生産遺跡	常盤町1丁目6015-5番	近世	H17~H18

## (1) 先土器時代～縄文時代草創期

米沢町遺跡の周辺では2遺跡から当該期の石器が出土している。大堀町遺跡(第3地点)では遺構外からチャート製の尖頭器が出土している(佐々木・岡口・大橋・林 2006)。また、笠原古墳群の南に位置する笠原メディカルセンター地内からは過去に長者久保・神子柴段階に帰属するとみられる打製石斧が採集されている(黒沢・島田・古屋・鈴木 2001)。

## (2) 縄文時代(早期～晚期)

縄文時代早期以降の遺跡は水戸南高校遺跡、吉田貝塚、安楽寺遺跡、お下屋敷遺跡、大堀町遺跡、下本郷遺跡、笠神町遺跡、横宿遺跡、千波山遺跡、葉王院東遺跡、柳崎貝塚が知られている。これらのうち、発掘調査が行われているのは、お下屋敷遺跡と大堀町遺跡、笠神町遺跡、葉王院東遺跡、柳崎貝塚だけである。

お下屋敷遺跡からは前期浮島式、中期加曾利E式、後期壠之内式の土器が出土しているようであるが、遺構は報告されていない(伊東 1971)。

葉王院東遺跡は、平成元年に千波中学校建設に伴う発掘調査が行われた際に2号竪穴状遺構から中期阿玉台式土器の破片とともに凹石が出土している(井上編 1990)。また、遺構外から早期沈線文系の田戸下層式土器、後期安行式とみられる土器片も出土している。

大堀町遺跡はこれまで5地点において発掘調査や試掘調査が実施されており、昭和63年に元吉田第3住宅団地造成工事に伴い実施された第1地点の発掘調査では、第5号遺構(土坑)から後期前葉塗之内I式期の縄文土器片が2点出土している。また、遺構外から、早期燃糸文式、中期阿玉台式、中期後葉から後期前葉、晚期前浦式土器の破片も出土している(井上編 1988)。

平成16年にグランディヒルズ元吉田造成工事に伴い、実施された第2地点の調査では、中期末葉加曾利E4式期～称名寺式期の土坑3基と帰属型式不明の土坑3基が確認されている(斎藤・大賀・新垣・佐藤 2005)。7号土坑から出土した輝石安山岩製の石棒は赤化しているうえに、折損後に多孔石に再利用されており、石棒の機能や性格を知るうえで興味深い資料である。また、11号土坑からは、砂岩製の三角柱状の石器が出土しており、石冠の可能性が指摘されている。造構外からは、早期撫糸文系の稻荷台から花輪台1式期、沈線文系の竹ノ内式末～三戸式古段階、田戸下層式・田戸上層式、中期阿玉台1b式、加曾利E4式、後期堀之内I式、安行1～2式期に位置づけられる土器片が出土している。

柳崎貝塚は前期前半の貝塚でA～Cの3地点からなる。昭和42年3月にA地点の貝塚が調査され、ヤマトシジミを主体とし、カキ・ハマグリ・タニシなどを僅かに含む主底貝塚であることが確認された(佐藤 1969)。貝層からは関山式、貝層下の土層からは子母口式に比定される土器などが出土している(佐藤 1979、市毛 1992)。

以上、米沢町遺跡周辺における発掘調査が実施された縄文時代早期から晩期の遺跡の様相を見てきたが、造構・遺物の在り方からは、早期から後期に至るまで断続的に土地利用が展開していたことが理解され、特に中期中葉～後期前葉にかけて集落の形成があったことがうかがえる。ただし、いずれ遺跡においても日常生活の拠点となる堅穴住居跡は現在のところ、1軒も確認されていないことから、現状で確認されている土坑や堅穴状造構は、集落の外縁部に該当するか、集落が未調査の別遺跡(地点)に展開している可能性を考えられよう。

### (3) 弥生時代

米沢町遺跡の周辺に展開する弥生時代の遺跡は、水戸南高校遺跡、お下屋敷遺跡、大鋸町遺跡、横宿遺跡、薬王院東遺跡、酒門台遺跡、吉田神社遺跡、荷鞍坂遺跡が知られており、鈴木素行氏はこれらの遺跡を「吉田遺跡群」と呼ぶことを提唱されている(鈴木 2002)。これらの遺跡のうち、調査が行われているのはお下屋敷遺跡と大鋸町遺跡、薬王院東遺跡に限られる。

お下屋敷遺跡は、正式報告がないものの、伊東重敏氏により断片的な報告がされている。伊東氏によると、十王台式期の堅穴建物跡が6棟報告されているようである(伊東 1971)。

大鋸町遺跡はこれまで3次にわたる発掘調査が行われており、弥生時代の集落が広く台地上に広がっていることが確認されている。昭和63年に発掘調査が行われた第1地点では、十王台式から古墳時代の土師器へと土器群が交代する時期に形成された集落が発見されており、調査担当者の井上義安氏は、両方の土器の製作技法を具有する土器を「大鋸町式」と呼ぶことを提唱している(井上編 1988)。平成15年に宅地造成に伴い、実施された第2地点の調査では堅穴建物跡3棟、土坑3基が確認されている(斎藤・大賀・新垣 2005)。

第3地点の調査では、縄文時代から弥生時代の所産とみられるピット2基が確認されたが、堅穴建物跡は確認されていない。弥生時代後期の土器が少量出土している(佐々木・岡口・大橋・林 2006)。

薬王院東遺跡は千波中学校建設に伴い、平成元年に発掘調査が行われており、弥生時代後期の堅穴建物跡が10棟検出されている(井上編 1990)。

### (4) 古墳時代

米沢町遺跡の周辺に展開する古墳時代の遺跡には、集落と首長の墓域である古墳群がある。古墳時代の集落は水戸南高校遺跡、お下屋敷遺跡、大鋸町遺跡、横宿遺跡、酒門台遺跡、吉田神社遺跡、荷鞍坂遺跡が知られているが、調査が行われているのはお下屋敷遺跡と大鋸町遺跡に限られる。

お下屋敷遺跡は水城高校および駅南開発により隠滅してしまっており、報告書も刊行されていないため、詳細は不明であるが、7世紀の堅穴建物跡が3棟確認されているようである(伊東 1971)。

大鋸町遺跡第1地点の発掘調査では、前期の堅穴建物跡5棟、中期の堅穴建物跡5棟、後期の堅穴建物跡7棟が確

認されている(井上編 1988)。

平成16年に実施された第2地点の調査では、前期の竪穴建物跡5棟、中期の竪穴建物跡5棟、中期の土坑1基、終末期の竪穴建物跡1棟が確認され、昭和63年の第1地点で確認された34号竪穴建物跡の須恵器無蓋高壙(TK23型式)と第2地点 7号竪穴建物跡の須恵器無蓋高壙(TK23型式)が遺構間で接合することが確認された(斎藤・大賀・新垣・佐藤 2005)。

第1地点と第2地点の古墳時代の竪穴建物跡の分布をみると、前期の竪穴建物跡と中期の竪穴建物跡は切り合っていないが、前期の竪穴建物跡と後期の竪穴建物跡は切り合っているものがある。このことは、中期の竪穴建物跡が營まれる際には前期の竪穴建物跡が完全に廃絶しておらず、上屋の一部が残っていたか、上屋が残っていなかったとしても、竪穴が窪地状に残っていたため、そこを回避した結果を示している可能性が考えられる。そして、後期の竪穴建物跡が造営される際には前期の竪穴建物跡は完全に廃絶し、竪穴の窪地も埋没していた可能性が高い。

次に古墳群についてみてゆこう。米沢町遺跡が立地する逆川流域には、笠原古墳群、福沢古墳群、払沢古墳群が分布している。笠原古墳群は後円部径15m、前方部長5m、高さ1.8mの帆立貝形古墳1基と直径10mの円墳から構成される古墳群であるが、遺物が採集されていないため、築造時期は未詳である。払沢古墳群は隠滅してしまったため、詳細は未詳であるが、福沢古墳群はかつて7基の古墳から構成されていたらしい。現在は3基しか残っていないが、直径7~10m、高さ0.8~1mと低墳丘のものがあることから、後期・終末期の群集墳である可能性がある。

逆川の左岸台地上の千波湖を望む北縁には、千波山古墳群が築造されている。千波山古墳群は、全長25m、後円部径10m、高さ1.3mの前方後円墳(第3号墳)、直径20m、高さ2mの円墳(第1号墳)、直径20m、高さ2.5mの円墳(第2号墳)の3基から構成され、第2号墳は円筒埴輪を伴っていることから、後期以降に形成された古墳群であろう。

千波湖を隔てた上市台地上にも東照宮境内古墳や無名古墳があるが、これらも隠滅してしまっているため、詳細は未詳である。

米沢町遺跡の北東から入り込む谷津を隔てた東の台地北縁には吉田古墳群が築造されている。現在は2基の古墳しか残っていないが、隠滅してしまった古墳がほかに2基あり、最低でも4基以上から構成される古墳群であったとみられる(関口・川口・瓦吹・小野・中尾 2006)。第1号墳は国指定史跡「吉田古墳」であり、墳丘の測量調査から方墳と理解されていたが(川上・相田・諸星 1972)、平成17年度から始まった水戸市教育委員会による周溝確認調査の結果、周溝がやや歪な八角形状を呈することが判明し、墳頂部の対辺長26m、外堤部の対辺長35mの規模であったと考えられることが明らかとなった(関口・川口 2007)。主体部には凝灰岩切石を組み合わせた無袖式の横穴式石室が採用されており、奥壁には武器や武具類が線刻されていることから、7世紀中葉頃に築造された線刻壁画古墳とみられる。

第2号墳は現状で一辺14m、高さ3mの方墳状を呈しているが、後世の土地利用で採土などが行われているため、墳丘形状については定かではないが、墳丘の南側で第1号墳と同様の凝灰岩の切石が部分的に露出していることから(関口・川口 2007)、凝灰岩の切石を組み合わせた横穴式石室が採用されている可能性が高い。

吉田古墳群の南東には大鋸町古墳と酒門台古墳群が築造されている。大鋸町古墳は、通称「キツネ塚」と呼ばれた直径8m、高さ約1.5mの円形のマウンドであったが、隠滅してしまった。酒門台古墳群は全長20m、高さ約2.2mの前方後円墳とそれよりも規模がやや小さい円墳の2基から構成されている。また、県道中石崎水戸線に面した宅地内には石室の天井石(凝灰岩製)が残存しており、横穴式石室を持つ古墳があったことを物語っている。いずれの古墳からも埴輪が採集されないことから後期~終末期の古墳群とみられる。

以上が、米沢町遺跡の周辺における古墳時代遺跡の様相であるが、集落は前期から後期にかけて形成されているのに対し、古墳は前・中期のものが知られておらず、終末期のものとみられる古墳がある一方で、終末期の集落の様相が不鮮明である点が特徴として挙げられる。

### (5) 奈良・平安時代

奈良・平安時代には米沢町遺跡の付近は吉田郷に帰属していた。当該期の遺跡はお下屋敷遺跡、大鋸町遺跡、薬王院東遺跡、梅香火葬墓跡、酒門台遺跡、荷鞍板遺跡が挙げられるが、調査が行われているのはお下屋敷遺跡、大鋸町遺跡、薬王院東遺跡の3遺跡に限られる。

お下屋敷遺跡は報告書が未刊のため詳細は不明であるが、奈良時代の竪穴建物跡2棟が確認されているようである(伊東 1971)。

大鋸町遺跡は第1地点では奈良時代の竪穴建物跡7棟、平安時代の竪穴建物跡8棟が確認されており(井上編 1988)、第2地点では奈良時代の竪穴建物跡9棟、平安時代の竪穴建物跡3棟、土坑2基が確認されている(斎藤・大賀・新垣・佐藤 2005)。他方、大鋸町遺跡の西方に展開する薬王院東遺跡では、奈良時代の竪穴建物跡8棟、平安時代の竪穴建物跡27棟が確認されている(井上編 1990)。

梅香火葬墓跡からは木葉下窓跡群産とみられる9世紀中葉の須恵器短頸壺と須恵器短頸蓋から構成される蔵骨器が1個体出土しているが(伊東 1971・川井・吉澤 1995)、蓋の径と壺の口径が一致することから、蔵骨器専用として生産されたものとみられる。

以上が、米沢町遺跡の周辺における奈良・平安時代遺跡の様相であるが、大鋸町遺跡と薬王院東遺跡は、谷津を隔てて300mという至近距離にあり、遺構の分布状況から吉田郷の中心集落であったとみられる。奈良時代の竪穴建物跡は両遺跡とともに同程度の数が確認されているが、平安時代の遺構は薬王院東遺跡の方が多い、特に9世紀中葉以降の集落は西に遷移している傾向がある。両遺跡からは掘立柱建物跡は確認されていないが、調査対象となっている場所が斜面地に近いことから、台地の平坦面や中央部に近い位置にそうした遺構が展開している可能性がある。

### (6) 中世・近世

米沢町遺跡の近隣にある中世・近世の遺跡には城館跡、集落遺跡、生産遺跡、水道跡、塚がある。城館跡で調査が行われているのは水戸城跡のみである。水戸城跡は12世紀末～13世紀初頭頃に常陸平氏の流れを汲む馬場資幹によって水戸城の本丸、現在の水戸一高付近に館を構えたのがはじまりとされる。資幹は建保2(1214)年に常陸大掾職に就任し、常陸平氏の惣領となり常陸府中と水戸に根拠を置いた。しかし、応永23(1416)年、大掾(馬場)氏は上杉神秀の乱において佐竹氏と対立して敗れ、衰退の一途を辿る。そして応永33(1426)年、当時河和田城を本拠として勢力を拡大しつつあった在地領主の江戸通房が、大掾満幹の留守を狙って水戸城を奪取し、江戸氏が大掾氏に変わり水戸地城の嗣権を握ることとなる。以後、水戸城は約160年にわたって江戸氏によって支配されることとなる。

江戸氏時代の水戸城は、本丸だけではなく二の丸まで整備され、本丸部分を「内城」、二の丸部分を「宿城」と呼んだ。内城は江戸氏の居城として、宿城は一族重臣の屋敷地および市が設けられたという。江戸氏は時に主家である佐竹氏と水戸地城の領有をめぐって争い、また常陸南部にも進出して常陸府中を脅かすまでになったが、天正18(1590)年の豊臣秀吉による小田原合戦への参画を怠ったことにより江戸氏の立場は急変する。同年、豊臣政権下の大名となった佐竹義宣は、秀吉から常陸一国を安堵され、江戸氏に水戸城譲渡を要求する。これを拒否した江戸重道に対し、義宣は同年12月19日に水戸城を攻撃し落城させた。重道は結城に落ちのび、水戸地城は義宣が領有するところとなった。天正19(1591)年3月、領国を統一した義宣は居城を太田城(常陸太田市)から水戸城に移し、文禄2(1593)年に水戸城および城下の大規模な普請を行った。この普請により、水戸城は近世城郭としての整備がなされたと言われている。

平成18年度に行われた水戸第二中学校の校舎改築に伴う発掘調査の際に、15世紀段階に深さ6m以上の谷を埋められている状況が確認された。これは、江戸氏による普請の痕跡とみられる。また、13世紀後半の古瀬戸瓶子に詰められた1,500枚にも上る大量の一括渡来銭も出土し、江戸氏の水戸城普請に伴う神仏へ埋納行為によるものとみられる。

集落遺跡では大堀町遺跡から中世・近世の遺構・遺物が確認されている。第2地点の調査では中世期の遺構は確認されていないが、青磁碗や白磁皿、瀬戸・美濃系の陶器菊皿や小皿、カワラケ、瓦質土器の壺や火鉢、鉄製鋤、至元通宝・元祐通宝・天聖通宝等の銭貨が出土している。これらは同遺跡が立地する台地上にある吉田城跡との関わりで理解される遺物である。近世の遺構は桶埋設跡の可能性がある2号土坑と1・2号溝が挙げられ、瓦質土器の土鍋・焜炉・碗・播鉢、七面焼の可能性がある土瓶、磁器染付の蓋物・皿・土瓶蓋・徳利、羽口、鉄釘、鉄滓などが出土している(斎藤・大賀・新垣・佐藤 2005)。

県指定史跡「笠原水道跡」は、米沢町遺跡の立地する台地の斜面下を流れる上水道跡である。初代水戸藩主頼房が下市地区の水質の悪い水に対し、住民の苦労の意を汲んで千波湖の水利事業に意欲を見せ始めたことに始まり、2代藩主光圀が良房の意志を受け継ぎ、創設された。光圀は寛文2年(1662)に設計調査を望月恒隆・平賀保秀に命じ、笠原水源から下市に向かって、提灯測量法に基づいて測量させ、神崎台地の基盤層となっている凝灰岩を切り出し、板状に加工して、組み合わせて岩橋や溜め樹を造った。完成には550両の経費と1年半の歳月を要したとされる(水戸市教育委員会 1982)。

七面製陶所跡は、第9代水戸藩主齐昭によって開かれた陶磁器の生産遺跡である。平成17年から水戸市教育委員会が行っている範囲確認調査の結果、常磐神社の階段の東側の2地点から連房式登窯の一部とみられる遺構と大量の陶磁器が廃棄された物原が確認された(川口・新垣・閑口 2006, 川口・閑口 2006)。連房式登窯の一部と物原が確認されたA地点ではサヤ鉢や輪ドチなどの窯道具とともに大量の土瓶・片口鉢などの未製品が出土していることから、日常雑器の焼成を目的としていたとみられる。他方、B地点の物原からは下絵の施された素焼き段階の土瓶・土瓶蓋・徳利・皿などが出土していることから、素焼き→下絵付のプロセスで廃棄された遺物群とみられる。また、A地点からは磁器の染付碗・皿などの破片が出土していることから、磁器の焼成に成功していたことも判明した。さらに糸筆の中に「偕楽園」の3文字が書かれた銘款を持つ花生や蒸し器の破片も出土したことから、これがボストン美術館のエドワード・シルベスター・モースコレクションの花生の銘款と同じであることから、ボストン美術館所蔵品も七面製陶所産の資料であることも判明する等、大きな成果が得られている。

七面製陶所は偕楽園に隣接していることから、いわゆる「御庭焼」と混同されがちであるが、偕楽園は製陶所よりも4年遅れて開園されているし、齐昭の製陶工場は、そもそも国の益であり領民の財を得るためにあったことから、殖産興業の一環であり、藩主が趣味のために庭園内で生産した御庭焼とは趣を異にする。

笠原南塚は、米沢町遺跡の南西部に築造されているが、調査が行われておらず、築造目的は未詳である。測量も行われていないため、マウンドの形状も定かではないが略測によると11.5m×10.2m、高さ1.5m程の規模のようである。

(川口)

## 2-3 米沢町遺跡における既往の調査

米沢町遺跡はこれまで水戸市教育委員会によって8地点で発掘調査が実施されている。以下、調査の概要をみてゆく(第2表)。

第1地点は平成17(2005)年に実施された宅地造成工事に伴う確認調査地点である。調査は進入道路部分にトレーンチを4本設定し、掘削した。その結果、中世以降のものとみられる溝跡2条のほか、土坑2基が確認されるとともに、縄文時代晩期の土器片、奈良・平安時代の須恵器片、中世の内耳土器等が出土した。

第2・3地点は平成17(2005)年に実施された個人住宅の建築に伴う試掘調査地点である。両地点からは遺構は確認されなかったものの、第2地点からは縄文土器片、土師器片、須恵器片、陶器片、礪など縄文時代から中世にかかる遺物が数点出土した、第3地点からは土師器片、須恵器片、陶器片など奈良・平安時代から中世にかかる遺物が数点出土した。

第4・6・7・8地点は平成18(2006)年に実施された個人住宅の建築に伴う試掘調査地点である。第4地点から遺構は確認されなかったが、須恵器・土師器の小片が数点出土した。

第6地点では、奈良・平安時代の土師器・須恵器とともに中世以降のものとみられる溝跡と土坑1基が本調査の対象となっている。第7地点から遺構は確認されなかったが、表土から須恵器・カラワケの小片が数点出土した。第8地点では遺構・遺物ともに確認されていない。

以上の調査成果から本遺跡は縄文時代、奈良・平安時代、中世にかけて土地利用が展開した集落遺跡であることが理解できる。

(川口)

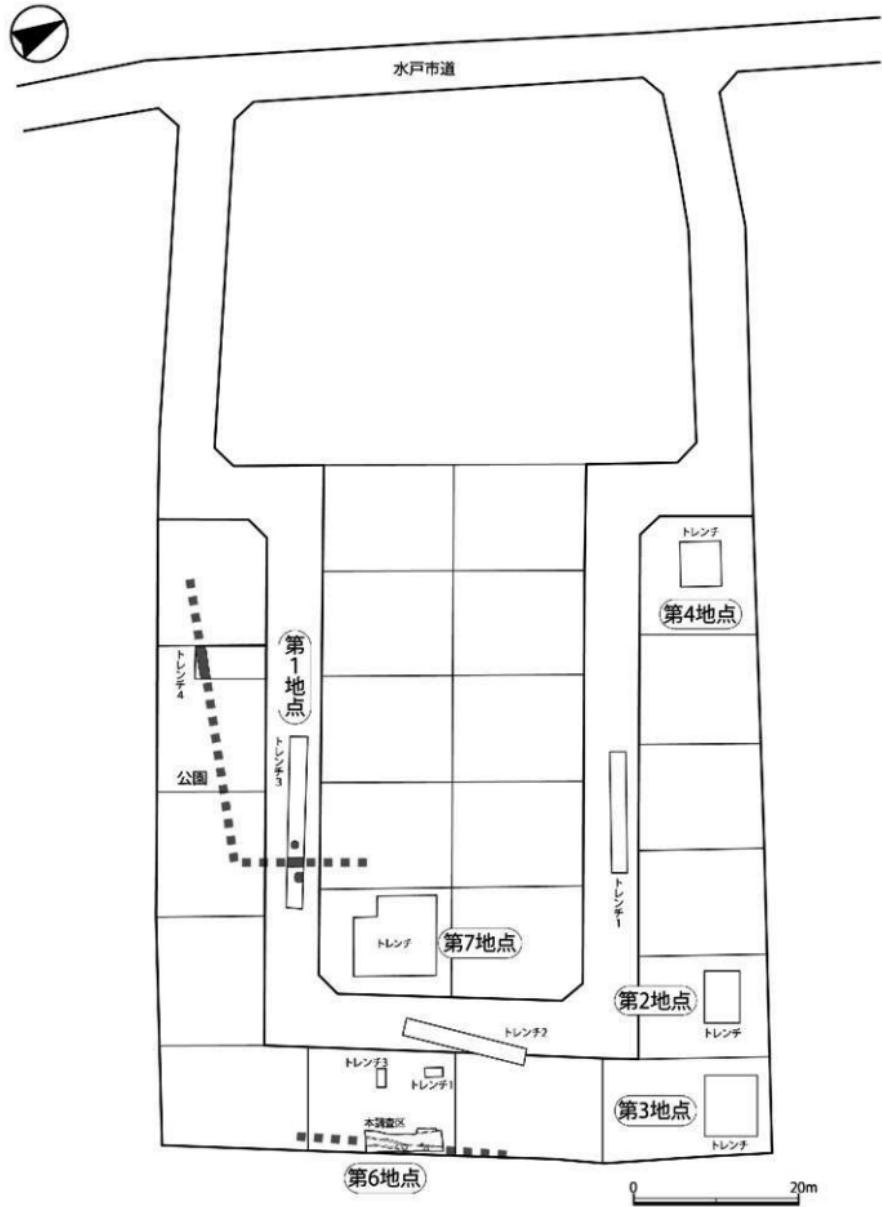


第3図 米沢町遺跡における既往の調査地点

第2表 米沢町遺跡における既往の調査

地点名	調査箇所	調査年度	調査開始日	調査終了日	調査種別	調査原因	調査面積(m <sup>2</sup> )	調査担当者	遺構	遺物
1	千波町字中通南1503番	17	8月11日	8月19日	試	宅地造成工事	132.00	間口慶久・新垣清貴	○	○
2	千波町字中通南1502-3番地	17	1月30日	1月30日	試	個人住宅建築	24.00	間口慶久	○	○
3	千波町字中通南1502 3番地	17	1月30日	1月30日	試	個人住宅建築	42.00	間口慶久	○	○
4	千波町字中通南1502 5	18	4月19日	4月19日	試	個人住宅建築	24.75	間口慶久・新垣清貴	—	△
5	千波町字中通南1501-3, 1501-4	18	4月20日	4月21日	試	住宅展示場建場	17.20	間口慶久・新垣清貴	○	○
6	千波町字中通南1502-12	18	4月20日	4月21日	試	個人住宅建築	12.00	間口慶久・新垣清貴	○	○
7	千波町字中通南1502-23	18	6月22日	6月22日	試	個人住宅建築	76.00	間口慶久・新垣清貴	—	○
8	元吉田町字一本松214-47, 214-48	18	7月6日	7月6日	試	個人住宅建築	9.00	間口慶久	—	—

※遺物側の○は遺構確認面や遺構底土中からの出土遺物、△は表土・複層層中からの出土遺物を示す。



第4図 米沢町道路(第1～4・6・7地点)の位置

## 第3章 検出された遺構と遺物

### 3-1 奈良・平安時代

#### 竪穴建物跡

##### (1) 竪穴建物跡SI01(第6～8図)

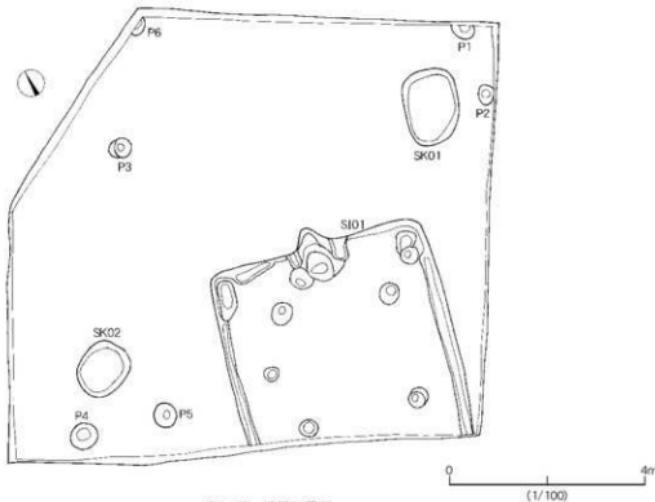
**位置** 本建物跡は、調査区の南に位置し、南壁辺側が保存区域に延びている。(第6図)

**規模** 南壁辺が未調査であり、全体の規模は不明。北壁辺中央にカマドが設置されており、東西軸4.75m、南北軸最大4.50mを測り方形を呈するものと推定される。北辺を主軸とすると方位はN-10°-E。遺構確認面である開東ローム層から床面までの深さは37cmで、柱穴は7本確認され、うちP1～P4が主柱穴である。またP5・P6は隅柱穴、P7は支柱穴である(第3表)。東壁・西壁・北壁西側直下には幅22.5～33.8cm、深さ3.6～13.4cmの周溝が巡っている。床面はほぼ平坦で、カマド前面から中央部にかけて顕著な硬化面が確認でき、全面貼床処理が施されている。覆土は3層に分層可能で、いわゆるレンズ状堆積の自然埋没層である。

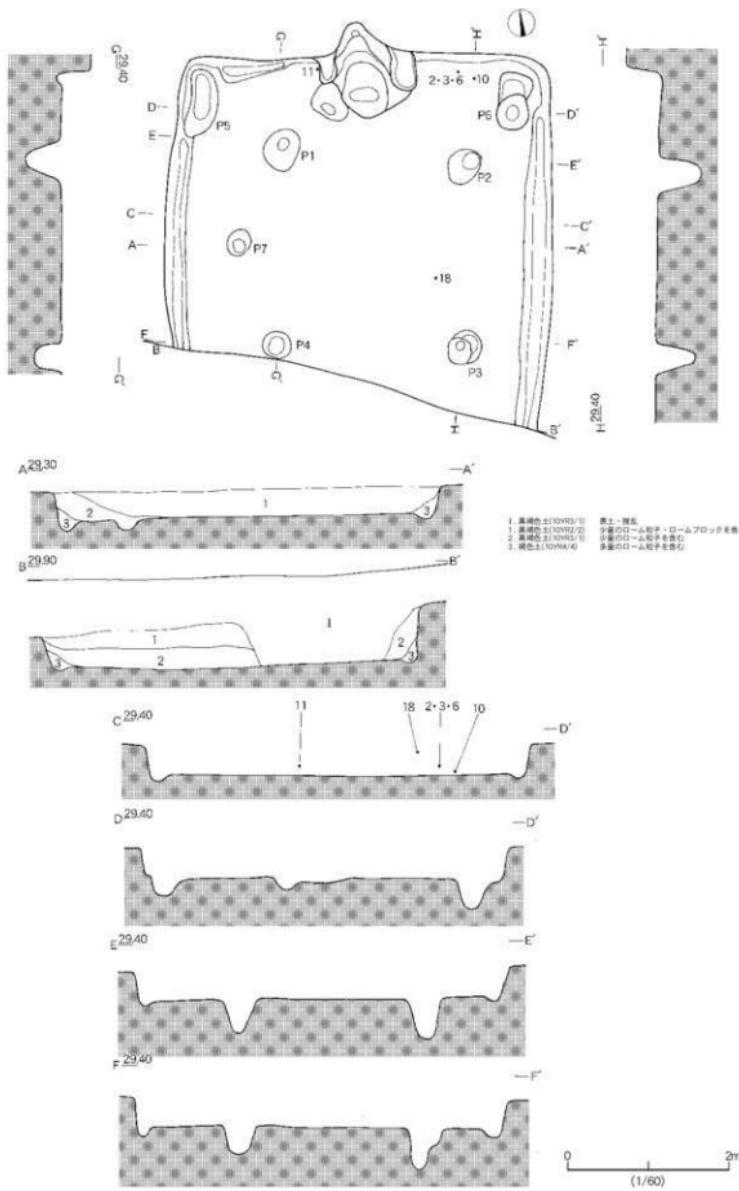
カマドは北壁ほぼ中央に設置され、北壁を42.0cm山形状に掘削し煙道部とし、焚口部から煙道部の長さ115.0cm、両袖部の幅119.0cmを測る。焚口部は60.0×65.0cmの円形を呈し、擂鉢状に掘り窪めている。覆土は9層に分層可能である。

第3表 竪穴建物跡SI01柱穴一覧

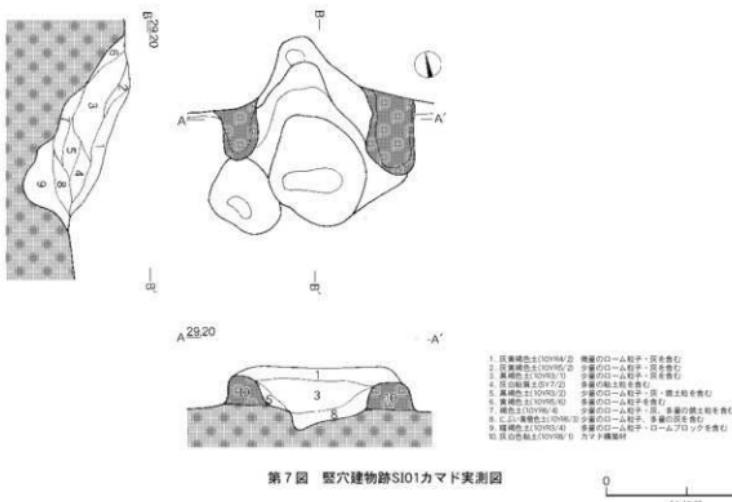
柱穴名	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	備考
P1	0.48	0.44	0.418	楕円形
P2	0.45	0.37	0.50	楕円形
P3	0.45	0.38	0.495	楕円形
P4	0.35	0.34	0.32	円形
P5	0.71	0.32	0.145	長楕円形
P6	0.68	0.39	0.305	長楕円形
P7	0.34	0.28	0.065	円形



第5図 遺構配置図



第6図 穴穴建物跡SI01実測図



第7図 壁穴建物跡SI01カマド実測図

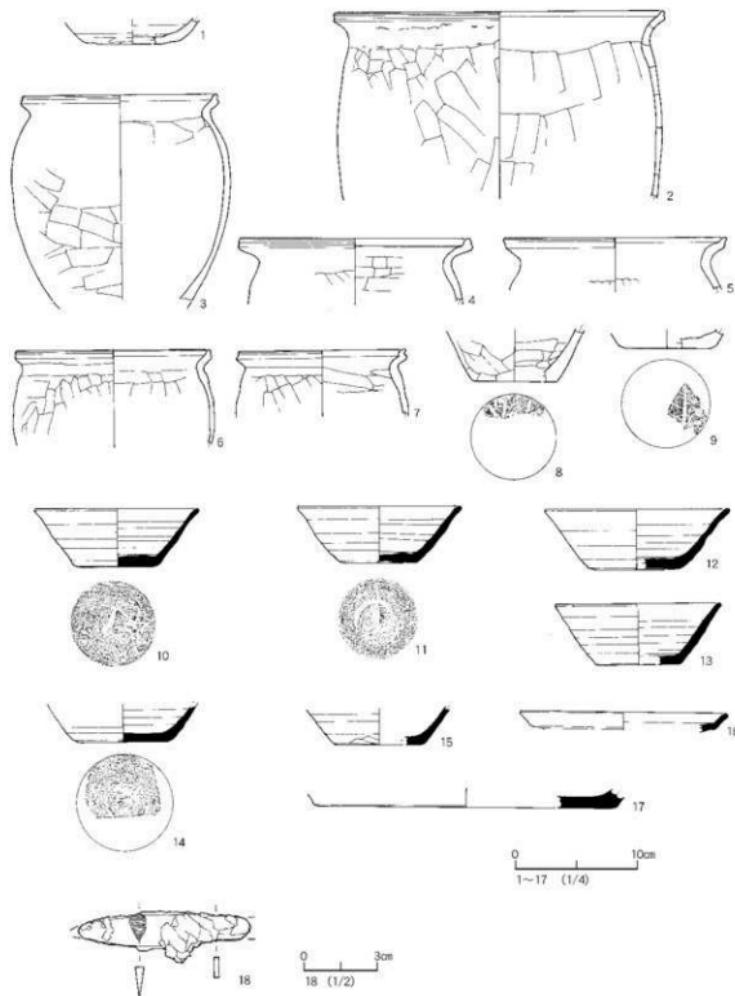
0  
1m  
(1/30)

**出土遺物** 土師器・壺1、甕8。須恵器・壺6、盤1、甕1の他鉄製品として刀子1点が確認された。第8図18は小型の刀子で刃先と茎部の一部が折損している。現存長7.09cm、刃幅1.53cm、背の厚さ0.41cm、茎部の最大幅1.13cm、背の厚さ0.35cm、重量9.36gである。闊は鋸合がすすみ明瞭ではないが直角に付けられている。

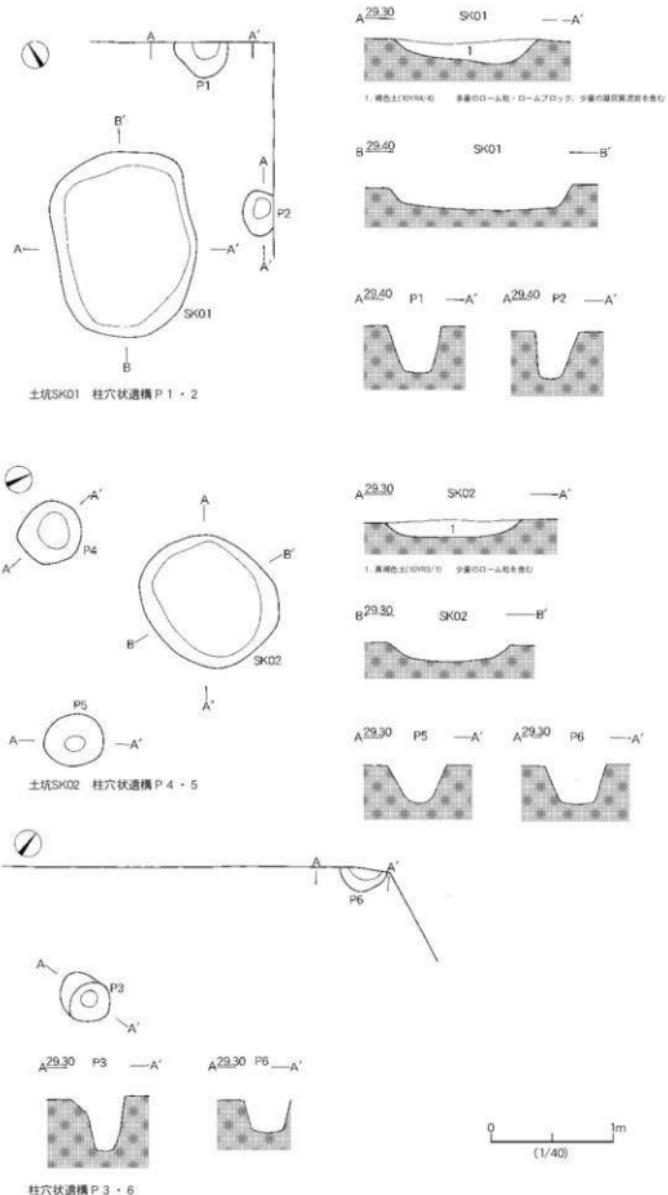
**造営時期** 出土遺物から判断して9世紀第三四半期とみられる。

第4表 壁穴建物跡SI01出土土器観察表

番号	器種	法量(cm)(復元値)		腹形・調整	胎土	色調	焼成	備考	
		口径	器高						
8-1	土師器	壺	-	(2.0)	4.6	ヘラケズリ・ヘラミガキ	海綿骨針・石英・長石	浅黄褐色	良好 黒色燒成
8-2	土師器	甕	17.0	(15.3)	-	ヨコナヂ・ヘラナヂ	石英・長石	にじい黃褐色	良好
8-3	土師器	甕	16.0	(16.8)	-	ヨコナヂ・ヘラケズリ	石英・長石	赤褐色	良好
8-4	土師器	甕	18.6	(5.4)	-	ヨコナヂ・ヘラナヂ	海綿骨針・石英・長石	黄褐色	良好
8-5	土師器	甕	18.2	(4.3)	-	ヨコナヂ・ヘラナヂ	石英・長石	暗赤褐色	良好
8-6	土師器	甕	16.0	(7.7)	-	ヨコナヂ・ヘラナヂ	石英・長石	黒褐色	良好
8-7	土師器	甕	13.8	(5.4)	-	ヨコナヂ・ヘラケズリ	石英・長石	暗赤褐色	良好
8-8	土師器	甕	-	(4.3)	6.8	ヘラケズリ	石英・長石	明赤褐色	良好 木葉痕
8-9	土師器	甕	-	(1.6)	7.0	ヘラケズリ	石英・長石	暗赤褐色	良好 木葉痕
8-10	須恵器	壺	13.4	4.8	6.0	底面部輪ヘラ切り	海綿骨針・石英・長石	灰白色	良好 ヘラ記号
8-11	須恵器	壺	13.4	4.7	6.0	底面部輪ヘラ切り	海綿骨針・石英・長石	灰白色	良好 ヘラ記号
8-12	須恵器	壺	-	(2.9)	15.6	底部手持ちヘラケズリ	海綿骨針・石英・長石	灰オリーブ色	良好
8-13	須恵器	壺	-	4.0	18.6	底部手持ちヘラケズリ	海綿骨針・石英・長石	灰オリーブ色	良好 ヘラ記号
8-14	須恵器	壺	-	(1.0)	10.0	底面部輪ヘラ切り	海綿骨針・石英・長石	灰白色	良好 ヘラ記号
8-15	須恵器	壺	13.0	4.5	7.8	底部手持ちヘラケズリ、体部下端ヘラケズリ	海綿骨針・石英・長石	灰白色	良好
8-16	須恵器	甕	-	-	-	ロクロナヂ	石英・長石	灰色	良好
8-17	須恵器	甕	-	-	-	底部ヘラナヂ	海綿骨針・石英・長石	褐色	底部焼付



第8図 積穴建物跡SI01出土遺物



第9図 土坑SK01・02柱穴状遺構P1・2・3・4・5・6実測図

## 土 坑

### (1) 土坑SK01(第9図)

調査区の北東側に位置する。平面形は南北に長い隅丸方形で、長軸153.0cm、短軸117.0cmを測り、主軸方位はN-31°-Wを示す。深さは12.8cm。壁面は外傾して立ち上がる。底面全体は軟弱で、踏み固められた痕跡は認められない。覆土は褐色土の單一層で埋戻し土層である。遺物は出土していないが、覆土の状況から判断して近世以降の墓坑であろう。

### (2) 土坑SK02(第9図)

調査区の南西側に位置する。平面形は東西に長い梢円形を呈し、長軸112.0cm、短軸98.0cmを測り、主軸方位はN-69°-Eを示す。深さは15.0cm。壁面は外傾して立ち上がる。底面全体は軟弱で、踏み固められた痕跡は認められない。覆土は黒褐色土の單一層で埋戻し土層である。遺物は出土していないが、覆土の状況から判断して近世以降の墓坑であろう。

## 柱穴状遺構

### (1) 柱穴P 1～P 6(第9図)

位 置 調査区西側から北側にかけてピットと呼称される柱穴状遺構が6基検出された。

規 模 形状は円形を基調とするものの、わずかに梢円形を呈しているものもみられる。規模は径37～51cm、深さ25～44cmと比較的まとまりをみせ、平均45cm前後に集中している。埋土は黒色土で覆われていた。遺物の出土はない。また柱痕跡の確認できるものもなく、しかも建物構造を示す配列等に規則性が認められなかった。したがって、柱穴の性格については不明である。柱穴の計測については下記のとおりである。

#### 柱穴計測値(単位cm)

	長径×短径	深さ		長径×短径	深さ		長径×短径	深さ
P1	43.0×(29.0)	36.1	P2	37.0×(26.0)	35.2	P3	44.0×36.0	44.1
P4	51.0×49.0	31.0	P5	50.0×44.0	31.0	P6	39.0×(20.0)	25.0

(小II)

## 第4章 総括

### 1. 土地利用の変遷

前章では米沢町遺跡の発掘調査により確認された造構・遺物について事実記載を行ってきた。本章ではこれらの成果について再確認を含めて本遺跡における土地利用について触れたい。

#### (1) 平安時代

今回の調査では竪穴建物跡1棟が調査区南側で検出された。南壁辺は保存区域に延びており全体を確認していないが、未調査部分は南壁面のみであり、その形状はほぼ把握可能である。まず規模は4.5mの方形を呈し、カマドを北壁辺中央に設置し、4本柱に北壁側に隅柱をもつ。ここから須恵器、土師器、刀子が出土し、これら出土遺物から9世紀第3四半期に相当するものと判断される。

本遺跡付近は吉田郷に帰属しており、吉田郷の中心的な集落に薬王院東遺跡と大鋸町遺跡が知られている。薬王院東遺跡は北東1kmに位置し、平成元年に第一・二調査区合わせて4,300m<sup>2</sup>を発掘調査している。ここから奈良時代8棟、平安時代27棟の竪穴建物跡が集中して検出された(井上 1990)。調査区域の状況から判断して、集落はさらに南側の平坦面に広がる可能性が高い。また大鋸町遺跡は本遺跡の東1.5kmに位置し、二回にわたり発掘調査が実施されている。まず昭和63年の一次調査では3,000m<sup>2</sup>が対象となり、奈良時代7棟、平安時代8棟の竪穴建物跡が明らかにされた(井上編 1990)。二次調査は平成16年で1,186m<sup>2</sup>が対象範囲となり奈良時代9棟、平安時代3棟の竪穴建物跡が検出されている(斎藤・大賀・新垣・佐藤 2005)。ここも同じように調査状況からみて集落はさらに広がることは予測される。この二遺跡は明らかに拠点的集落の一端を示しており、しかも幅300mの谷津を挟んで立地する農業生産体制を共有する単位集団的な集落群を形成している。しかし、これら調査成果を概観的にみると大鋸町遺跡が奈良時代・平安時代とともにその増減差が少ないのに対し、薬王院東遺跡では奈良時代より平安時代の竪穴建物が増加する傾向が読み取れる。一方米沢町遺跡でも1.5km圏内という狭小範囲内に立地し、9世紀後半という一時的とはいえ三遺跡は至近距離において同時期の建物を構えていたこととなる。こうした居住形態の背景に何があるのかは今後の課題となろうが、ひとつの予測とし、これらが相互補完的な主従関係、すなわち母村→子村の関係をもっていたことも考慮する必要があろう。全体的な様相が明らかにされたわけではないが、三遺跡を単純に鳥瞰した場合、そこには居住建物が一定の場に留まるのではなく常に変遷していることがわかる。さらにそれに伴い主従関係も変動していくとみることができる。その要因として土地保有(可耕地面積)とそれに直接関わる農業生産力の増大縮小に伴う人口変動があることを示している。それが結果として各遺跡における居住建物の増減を表しているのであろう。9世紀前半まで律令制の成立・確立に応じた社会形成であったものが、9世紀後半はその体制が変質しつつあるといわれている。すなわち新たな土地に移り村の形成が行われる新規集落の展開である。米沢町遺跡が大規模集落の解体により小規模散村の典型と推定することも可能であろう。

#### (2) 近世以降

ここでは古代末から中世にかけての転換期は空白期間といえる。造構としては明確ではないが、近世と推定される土坑と柱穴状造構が検出されている。まず土坑が2基検出されている。隅丸長方形を呈し、遺物の出土はないが、覆土の状況は明らかに埋戻し土層である。これらの状況から近世墓と判断した。近世墓の多くは人骨もしくは六道鏡、キセル等の副葬品の出土がみられるが、ここではあいにくこれら痕跡は確認できなかった。しかし、付近は近世交通の要衝として町形成が進展していくなかで、この地が墓地に選定されていく過程は今後の新たな課題となるであろう。

(小川)

## 引用・参考文献

- 市毛美津子 1992 「柳崎貝塚出土遺物の再検討」『婆良岐考古』第14号 婆良岐考古同人会
- 伊東重敏 1971 『水戸市埋蔵文化財包蔵地基本調査報告書(応急版)』水戸市教育委員会
- 井上義安編 1988 『水戸市大堀町遺跡(仮称)元吉田第三住宅団地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』水戸市大堀町遺跡発掘調査会
- 1990 『薬王院東遺跡』水戸市薬王院東遺跡発掘調査会
- 井上義安・夢沼香未由・仁平妙子・根本睦子 1998 『水戸市埋蔵文化財分布調査報告書 平成10年度版』水戸市教育委員会
- 茨城県教育委員会 2000 『茨城県遺跡地図』
- 川井正一・吉澤悟 1995 「茨城県の奈良・平安時代の墓制について」『第5回 東日本埋蔵文化財研究会 東日本における奈良・平安時代の墓制—墓制をめぐる諸問題—』第Ⅰ分冊 一北海道・東北地方・関東一部』東日本埋蔵文化財研究会木桶大会実行委員会
- 川上博義・相田公平・諸星政得 1972 「吉田古墳の測量調査」『常総台地』6 常総台地研究会
- 川口武彦・閑口慶久・新垣清貴 2006 『(41)水戸市常磐町所在「七面製陶所跡」の調査と課題』『日本考古学協会 第72回総会 研究発表要旨』日本考古学協会
- 川口武彦・閑口慶久 2006 「水戸城下における近世生産遺跡の調査—七面製陶所跡の調査を中心—」『江戸遺跡 研究会会報』第106号 江戸遺跡研究会
- 河野一也・水野順敏・河野真理子 2004 『町田焼窯跡』水府村教育委員会
- 黒沢浩・島田和高・古屋紀之・鈴木尚史 2001 「川上博義氏寄贈の石器時代・古墳時代資料について」『明治大学博物館研究報告』第6号 明治大学博物館
- 斎藤洋・大賀健・新垣清貴・佐藤晃雅 2005 「大堀町遺跡 グランディヒルズ元吉田造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』水戸市教育委員会・グランディハウス株式会社・株式会社地域文化財コンサルタント
- 佐々木藤雄・閑口慶久・大橋生・林邦雄 2006 『大堀町遺跡(第3地点)一市道浜田207号線側溝新設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一』
- 佐藤次男 1969 「水戸市柳崎貝塚下層出土の子母口式土器について」『茨城考古学』第2号 茨城考古学会
- 1979 「柳崎貝塚」『茨城県史料 考古資料編 先土器・縄文時代』茨城県
- 鈴木映一・川崎純徳・小野寺淳・來本雅之・辻本崇夫・笠博義・川又由之・閑口慶久・川口武彦・三井猛・木本肇周 2006 『水戸城跡 三の丸土塁および堀の復旧に伴う工事・調査報告書』茨城県・水戸市教育委員会
- 鈴木素行 2002 「仙湖の辺—「武田式」以前の「十王台式」について—」『茨城県史研究』86 茨城県立歴史館
- 閑口慶久・川口武彦・瓦吹堅・小野寿美子・中尾麻由実 2006 『吉田古墳I—史跡整備計画に伴う吉田古墳群第1号墳の第1次・第2次発掘調査報告書一』水戸市教育委員会
- 閑口慶久・川口武彦 2007 『吉田古墳II—史跡整備計画に伴う吉田古墳群第1号墳の第3次発掘調査報告書一』水戸市教育委員会
- 水戸市教育委員会 1982 『茨城県指定史跡 笠原水道確認調査報告書』

# 写 真 図 版





1. 調査区全景



2. 調査区全景



1. 遺跡遠景



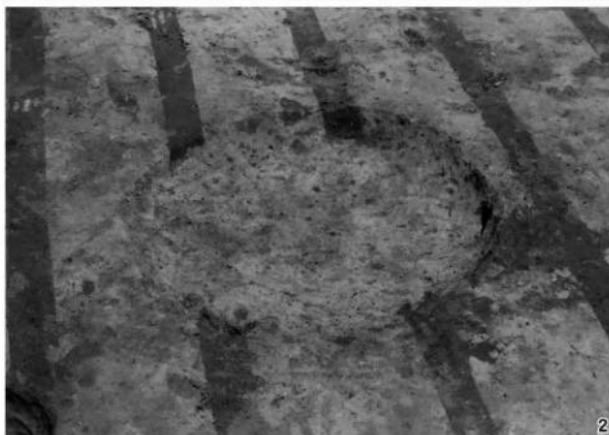
2. 竪穴建物跡SI01



3. 竪穴建物跡SI01カマド



1



2



3

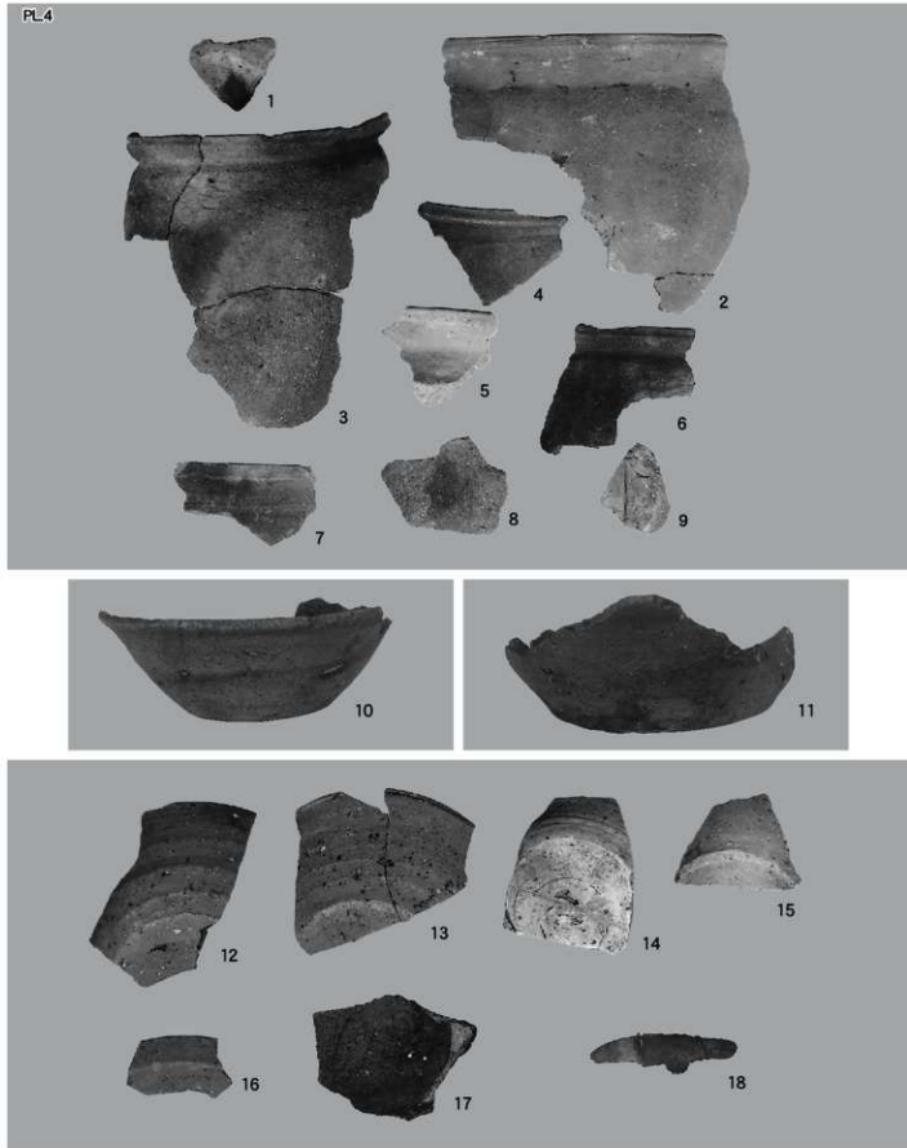


4



5

1. SK01    2. SK02    3. P03 • 06    4. P01 • 02    5. P04 • 05



竖穴建筑物SI01出土遗物

## 報告書抄録

ふりがな	よねざわちょういせき(だいごちてん)							
書名	米沢町遺跡（第5地点）							
副書名	住宅展示場建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	水戸市埋蔵文化財調査報告 第13集							
編集者名	小川和博・大淵淳志							
著者名	小川和博・大淵淳志・岡口慶久・川口武彦・遠藤啓子							
編集機関	有限会社 日考研茨城	所在地	〒300-0508 茨城県稟敷市佐倉3321-1 ☎029-892-1112					
発行機関	水戸市教育委員会	所在地	〒310-8610 茨城県水戸市中央1-4-1 ☎029-224-1111(代)					
発行年月日	2007(平成19)年3月26日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
米沢町遺跡 (第5地点)	水戸市千波町字 中道南1501-3, 1501-4番地	08201	058	36° 21' 16"	140° 28' 05"	2006.5.22 ~ 2006.5.25	82.05m <sup>2</sup>	住宅展示場建設工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
米沢町遺跡 (第5地点)	集落跡	平安	竪穴建物跡1		土師器、須恵器、 鉄製刀子			
		中世以降	土坑2、柱穴状遺構6		なし			

※北緯・東経は測地系2000対応。Web版TKY2JD(Ver.1.3.79)による変換。

### 水戸市埋蔵文化財調査報告

第1集	台渡里廃寺跡 一範開確認調査報告書一	2005年3月発行
第2集	台渡里廃寺跡 一市道常磐17号線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(1)一	2005年4月発行
第3集	大鋸町遺跡 一グランディヒルズ元吉田造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一	2005年8月発行
第4集	台渡里廃寺跡 一市道常磐17号線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(2)一	2006年3月発行
第5集	台渡里遺跡 一集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一	2006年3月発行
第6集	吉田古墳I 一史跡整備計画に伴う吉田古墳群第1号墳の第1次・第2次調査報告書一	2006年3月発行
第7集	大鋸町遺跡(第3地点) 一市道浜田207号線側溝新設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一	2006年3月発行
第8集	坏遺跡(第3地点) 一ヴィヴァンコート赤塚建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一	2007年3月発行
第9集	坏遺跡(第4地点) 一プランタンコリースII建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一	2007年3月発行
第10集	吉田古墳II 一史跡整備計画に伴う吉田古墳群第1号墳の第3次発掘調査報告書一	2007年3月発行
第11集	平成17年度水戸市内遺跡発掘調査報告書	2007年3月発行
第12集	アラヤ遺跡(第2地点) 一市道常磐10号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一	2007年3月発行
第13集	米沢町遺跡(第5地点) 一住宅展示場建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一	2007年3月発行
水戸城跡	三の丸土塁および堀の復旧に伴う工事・調査報告書	2006年9月発行

水戸市埋蔵文化財調査報告 第13集

### 米沢町遺跡(第5地点)

一住宅展示場建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一

印刷 平成19年3月26日  
発行 平成19年3月26日

編集 有限会社 日考研茨城  
発行 水戸市教育委員会  
印刷 有限会社 田辺印刷